

たまのよこやま

「境・道・恵

—多摩丘陵の3つの顔—

令和4年度企画展示 好評開催中

1/964 ～多摩ニュータウンの調査を振り返る～

多摩ニュータウン No.72・795・796 遺跡特集③1

遺跡だより 豊島区 長崎一丁目周辺遺跡 3

あの遺跡は現在?! 都営野毛町アパート いま 世田谷区下野毛遺跡 しものげ 4

学芸員のお仕事 (3) イベントの運営 5

令和4年度企画展示「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔—」解説 (3) 「恵」7



1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。



#54 多摩ニュータウン No72・795・796 遺跡特集③

今回で3回目となる多摩ニュータウンNo.72遺跡の紹介です。第1回は第1次調査の概要、第2回は第7・8次調査の成果を中心に紹介しましたが、本号では、発掘調査の後に行われた整理作業から報告書刊行にまつわる話を中心にしたいと思います。

第1次調査終了（1989年）の後、第2～5次（1989～1994年）と別班による調査が続く中、整理作業は1994年から始まりました。その途上、第3～5次調査分・No.796第5次調査分も合わせて報告することになり、長期5ヶ年計画の基に報告書の編集がスタートしました。縄文時代中期の住居跡200軒、遺物は土器約62万、土製品約1.4万、石器約5.5万点という膨大な量のため、報告書は、本文・遺構（遺構・遺物出土状態）・遺物（土器・土製品・石器）・各写真などで各々分冊とし、整理終了次第刊行することとしました。当初、この報

告をもってNo.72遺跡の調査は終了、遺跡西側は保存とされていましたが、急遽、開発計画が浮上し、調査することとなりました。

1996年10月～11月の第6次調査では古代の住居跡を、1999年4月～2001年1月の第7・8次調査では縄文時代中期環状集落の西半部、前期初頭の環状集落など多数の遺構・遺物を検出し、後者の調査により、結果的に中期集落の全容が明らかとなりました。住居跡91軒、土器約13万、土製品約1万、石器約1.3万点を数えた整理作業は前回同様に5ヶ年計画で分冊ごとに刊行していきました。

前後2回の整理作業は10年に及びました。出土遺物は、土器約75万、土製品2.4万、石器6.8万点を数え、報告書は22冊（約8,300頁）、折込図124枚となりました。



縄文時代中期前葉の土器



縄文時代中期後葉の土器



顔面装飾



釣手土器



硬玉製大珠（ヒスイ）



全 22 冊の発掘調査報告書と付図 2 冊
当センターの図書コーナーで閲覧できます。



現在のNo. 72 遺跡（2022 年 11 月・南から撮影）
遺跡の西側がマンション、東側が堀之内芝原公園

これら膨大な量の遺構・遺物を整理するにあたり、第一に留意したのは、出土遺物全点の把握でした。その後の整理・分類に供するために遺物整理台帳に各種情報を記入していきました。そして第二には、一刻も早く調査成果を公開するという目的のため、遺構・遺物の事実記載を主眼として報告書を刊行していくことでした。結果的には、前半・後半の本文編 2 冊には統括的な分析、遺物の分類・編年など欠落している考察が数多くあり、慙愧に堪えませんが、このNo. 72 遺跡の内容をまず公開することに重点を置いた結果、各種分析・考察が掲載できず、自身の力量不足を痛感する次第です。

しかしながら、遺物台帳の作成によって、完形個体から微小遺物まで一通り確認したことで、様々な新知見（これまで検出されなかった搬入土器、石器模造品、石材など）が得られ、報告書に還元することができました。

第 8 次調査時の住居跡覆土水洗で発見されたミニチュア土偶（前号で紹介）のように、細片の山にうずもれた中に、貴重な情報が数多く存在していることが如実に証明されました。遺跡の調査・整理において、出土量が多いほど微小遺物の取扱いが二の次になる傾向が垣間見えますが、完形の土器・石器は無論のこと、指の爪ほどの微小な遺物であっても、新たな歴史の構築に供することができる資料が埋もれている事実を目を向け、時間的制約があろうとも、手を抜かない姿勢が必要だと思えます。調査・報告者のみが目にし、公



西側を調査中のNo. 72 遺跡（2000 年 11 月撮影）

開されない情報が多ければ多いほど、その遺跡の歴史的重要性・価値が下がっていくのです。調査に携わった者は、そのことを十二分に認識して、謙虚に遺構・遺物に向かい合うことが責務であるといえましょう。

さて、遺跡の発掘調査・整理作業から報告書刊行がなされた後、またその途上で、その成果を一般に供する手段として、見学会・展示会などがあります。No. 72 遺跡でも、発掘調査中に大規模な見学会を実施し、地域住民の方・有識者などに情報を公開しました。また、調査終了後は、センター展示ホールにて特別展を開催し、出土遺物などを公開しました。2021 年には江戸東京博物館で開催された「東京に生きた縄文人」展でも主な出土遺物を展示し、衆目を集めました。

発掘調査された遺跡は学術調査などを除き、ほぼその後の開発により消滅してしまいます。No. 72 は集落中央部が保存地区として公園となっていますが、調査された大半の住居跡などは残っていません。この遺跡の情報としては報告書に記載された遺構と収蔵されている遺物のみです。これからの未来において、残された情報をいかに伝えていくか、また更なる分析・考察を加え、その時代・地域の歴史の中にかに位置付けていくか、我々に与えられている課題は数限りなくあります。埋蔵文化財の存在意義は、遺跡調査・報告が終わってからも模索され続けるといえるでしょう。

（丹野 雅人）

豊島区 長崎一丁目周辺遺跡

所在地 : 豊島区长崎一丁目
 調査期間 : 2020年8月～2021年1月(第1期)
 2022年7月～(第2期)
 調査面積 : 1,363㎡

長崎一丁目周辺遺跡(豊島区 No.10)は、豊島区长崎一丁目に所在し、武蔵野台地北東部にあたる豊島台と呼ばれる台地に立地しています。谷端川^{やばた}が台地上を南流し、西武池袋線の椎名町駅付近でU字状に大きく屈曲しながら北上します。この谷端川に囲まれた半島状の台地の先端部分が、当遺跡の範囲にあたります。

過去の調査では、主に江戸時代以降の礎石建物跡・溝・畝・井戸といった土地利用痕跡などが検出されています。それより古い時代の遺構・遺物についてはあまり見つかっておらず、古墳時代末から奈良時代初頭のカマドを備えた竪穴住居跡が1軒検出されているのみです。

そのような中、本遺跡では都道整備事業に伴って、令和2年8月から令和3年1月にかけて、当センターによる発掘調査(第1期)が行われました。その際近代の土坑から発見されたのが、写真1の塼^{せん}です。

塼は古い寺院の基壇などに用いられる敷瓦です。本遺跡で見つかった塼は上面に複弁蓮華文、側面に唐草文が施され、朝鮮半島の統一新羅時代(西暦668～900年)に都に近い寺院で用いられていたものとよく似ていました。このようなものが、なぜ本遺跡から見つかったのでしょうか。

池袋の西方に存在したアトリエ村が、この謎を解くヒントかもしれません。昭和初期から戦前にかけて、周辺の要町や千早とともに、長崎ではアトリエ付きの貸家が数多く建てられ、長崎アトリエ村と呼ばれていました。これらは芸術家、詩人、小説家、映画人、学生たちに安く貸し出され、芸術活動や交流の場となったことが知られています。

調査地点は、このアトリエ村が立地していた地域に非常に近接しています。塼が出土したのは写真2の方形の土坑で、塼のほかにも加工されたガラス管、真空管、電極に用いられる炭素棒などの遺物が様々見つかっています。また、普段使いの陶磁器に混じって、当時普及し始めた洋食器の皿やティーカップなども散見されます。このことから当時この地域に在住していた芸術家もしくは相当の知識人が、塼の美術的あるいは骨董的な価値に着目して手に入れたと考えられるのではないのでしょうか。



写真1 令和2年度の調査で出土した古代の塼



写真2 塼が出土した土坑

こうした明治時代以降の遺構や遺物は、比較的新しい時代のものであることから考古学の対象とならないと思われがちですが、地域の歴史を復元する上で重要な資料であることに変わりはありません。自治体によっては、発掘調査においてもきちんと記録を残すことを求めています。

当遺跡では、令和4年12月現在も第2期の発掘調査が行われています。今回の調査では、アトリエ村に関係すると思われる遺構や遺物はまだ見つかっていませんが、明治時代から第二次世界大戦中にかけての、近代の遺構・遺物が数多く検出されています。今後の調査成果によっては、アトリエ村の新たな一面が明らかになる可能性もあります。発掘調査は、令和5年3月末まで行われる予定です。

(橋本 望)

いま あの遺跡は現在！？ Vol.21

— 都営野毛町アパート 世田谷区下野毛遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。

このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。

もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

今回紹介する「下野毛遺跡」は、東急電鉄の等々力駅から南西へ徒歩10分程のところのところに所在します。発掘調査は都営野毛団地の建替え事業に伴って、平成29年度から実施し、調査後の現在は都営野毛町アパートが建設されています。また、調査地点の北西に隣接する玉川野毛町公園には、全長82m、高さ11mと帆立貝形古墳としては最大級で、東京都指定史跡の野毛大塚古墳が所在します。

発掘調査では旧石器時代から中世までの遺構や遺物が見つかっています。特に古墳時代の遺構として、古墳(周溝)が2基検出されました。「野毛2号墳」は、過去の周辺の発掘調査成果から、円墳の可能性が指摘されていましたが、今回の調査地点で周溝の延伸部分が検出され、野毛大塚古墳と同類の帆立貝形古墳と判明しました。周溝から出土した埴輪から6世

紀初頭頃に構築されたと思われます。そして、調査区北西側では新たに古墳が1基見つかり、「野毛13号墳」と名付けられました。「野毛13号墳」は一辺約20mの方墳で、周溝からは高坏と鉄鎌が近接して出土しており、古墳で行われた祭祀行為に係るものと想定されています。年代は5世紀の第1四半紀と野毛大塚古墳の構築時期に近く、両古墳の関係が注目されます。

本遺跡の傍には等々力溪谷があり、さらに溪谷を挟んだ東側には野毛大塚古墳に次ぐ大きさの「御岳山古墳」も所在します。小春日和を選んで、遺跡周辺の自然・歴史散歩を楽しんでみてはいかがでしょうか。(武内 啓)

◆調査成果が掲載された報告書

2019『下野毛遺跡Ⅳ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第346集 東京都埋蔵文化財センター



写真1 発掘調査地点の現在の様子(左の建物が都営野毛町アパート)。写真右奥に「野毛大塚古墳」の墳丘が見えます。

写真2 今回発掘調査された「野毛2号墳」と「野毛13号墳」(南から)。野毛大塚古墳のすぐそばで見つかりました。



写真3 「野毛2号墳」の周溝から出土した埴輪

写真4 「野毛13号墳」から出土した高坏と鉄鎌

学芸員のお仕事 (3) イベントの運営

当館に限らず、近年多くの博物館で重要な業務となっているのが、体験教室や講演会のようなイベントの開催です。博物館本来の業務は資料の保存や展示にあるとはいえ、まずは来館いただかないことには話になりません。イベント開催は足をお運びいただく機会を増やし、また、どうしても視覚や文字情報中心になりがちな展示とは違った方向から埋蔵文化財への理解を深めていただけるという点でも、館運営において大きな意義があります。今回の「学芸員のお仕事」ではこのようなイベントの運営に際して当館の学芸員がどのような業務を行っているのかを簡単にご紹介してみたいと思います。

実施イベントの決定

次年度のイベントの開催日程は前年度の3月に決定します。当館では年間行事予定表をウェブ等で公開しているのですが、それを見ると季節や月によってイベントの開催頻度に大きくバラツキがあるのが分かると思います。大まかに言って例年7月から11月にかけて多く、特に7・8・9月に集中している一方で、それ以外の季節は少なく、特に2月は1つしか行っていません。夏に多く開催するのはやはり需要が大きいため、特に7月末から8月にかけては学校の夏休みに合わせて、親子でご参加いただける体験教室を多く開催しており、自由研究にも役立てていただいているようです。一方で、4～6月・12～3月のイベントが少ないのは他業務との兼ね合いも影響しています。6月までは近隣の小学校の社会科見学、12月以降は来年度の企画展示の準備といった業務の比重が大きくなるため、イベントについては控えめになっているというわけです。

参加募集

当日受付を除き、応募受付はウェブと往復はがきで行っています。申込み用のウェブページはイベントの約一ヶ月前に作成し、最近はTwitterでも募集について告知しています。来館者向けに、館内配布用のチラシを製作する必要があります。

ウェブでの申込みは便利と参加者の皆さまからの評判も良いのですが、PC等の環境が整っていない方もおられるため、往復はがきによる申し込みも併



館内配布用のチラシ

用しています。応募が募集人数を上回った場合抽選を行い、メール・はがきで結果をお知らせします。

事前準備

イベントを行うに当たっては事前準備が不可欠です。人気イベントの土器作りを例にとってみましょう。当館の土器作りでは多摩ニュータウン No.248 遺跡の発掘調査終了後に周辺から採取した（縄文時代に実際に土器製作に使われていた）粘土・陶芸用のテラコッタ・砂※を混ぜたものを使用しますが、この土の調整作業にはなかなか手間と時間がかかります。大きさを揃えるためにフルイにかけた砂を手作業で粘土に混ぜ込むことから始まり、砂を混ぜ込んだ粘土は土練機どれんきという専用の機械を使ってさらに馴染ませます。均一にするために何度も繰り返し土練機にかけ、また適切な柔らかさになるように水分量の調節も必要です。このようにして調整したものを一年以上寝かせることでようやく土器作りに使える粘土が出来上がります。出来上がった粘土はストックしておくのですが、時間が経つと水分が蒸発して固くなってしまいますので再度練り直すこともしばしばです。

以上は土器作りの例ですが、糸作りだと材料のカラムシの刈り取りと水漬け、火起こし道具作りだと素材となる部品の製作等、それぞれのイベントに応じて必要な事前作業があり、実際にはイベントそのもの以上に準備に時間がかかることもあるのです。

※土器焼きの際の割れ防止のため。粘土だけでは水分が抜けたことによる収縮によりヒビが入ってしまう恐れがあるので、そ

当センターの調査研究員の多くは都内の発掘調査に出向いていますが、その一部はセンター本部の「中の人」として、広報学芸業務に従事しています。その仕事ぶりや、いかに。



土練機を用いた粘土の調整作業



糸作りに用いるカラムシの水漬け作業

れを防ぐために混ぜもの（混和剤）として砂や有機物等さまざまな素材を混ぜることが縄文時代から行われている。

イベント開催

このようにしていよいよ開催日を迎えます。ここまで来てしまえば後は準備したとおりに行うだけなのですが、特筆すべきことがあるとすれば、やはり新型コロナウイルスの影響でしょうか？感染拡大防止のため閉館、あるいはイベント全般を中止していた時期があったことを考えれば、現在はイベント運営に関してはほぼ正常化していると言って良いのかもしれませんが、それでもやはり影響は残っています。最も大きいのが参加人数に関してで、いわゆる「密」を避けるため、実習室で行う製作系のイベントに関しては概ね一回につき8名を上限としています。土器作りを例にして考えると、コロナ以前は最大32名で行ったこともあり、それと比較すると4分の1程度の方にしか参加いただけていないわけです。参加者の方により丁寧に対応できるという意味では悪い面ばかりでもないのかもしれませんが、イベントによっては応募が募集人数を大幅に上回ることもあり、心苦しい状態が続いています。

技術継承

これも近年さまざまな業界に共通の問題なのですが、当センターでもベテラン職員から若手職員への経験や知識の継承が課題になっています。当館の体験イベントは40年近くに渡る歴史の中で代々の職員がそれぞれに工夫をこらして考案してきたものですが、それらを中心として担っていた職員が担

当を変わり、あるいは退職すると、どうしても引き継ぎが課題になります。特に近年ではベテラン職員の退職が続く一方で相対的に若手職員が増えていることから、さまざまなイベントのノウハウをどのように受け継いでいくかが大きなテーマとなっています。参加者に作り方等を指導するためには職員がきちんと出来る必要があるわけですが、土器作り・糸作りなど製作系のイベントでは、経験がモノを言う部分が大きいですから、開催のたびに職員も製作してみる等して技術の向上を図っています。

学芸員の仕事のうち、イベントの開催について書いてみました。少ない紙幅で書ききれないことも多くありますが、少しでも雰囲気が伝わったでしょうか？「中の人」もさまざまに工夫を凝らしているイベント、機会があればぜひ参加してみてください。

（舟木 太郎）



土器作り教室の風景

多摩丘陵には豊富な水、生い茂る木々、粘土といった豊かな資源がありました。人々はそうした恵みを求め、時代を通じて丘陵にやってきます。

例えば粘土は、やきものや窯をつくるのに欠かせない資源です。多摩丘陵では、やきものづくりに適した性質の粘土が採れることから、縄文土器や古代の瓦などの生産が活発に行われてきました。

現在の町田市小山ヶ丘にある多摩ニュータウン(以下、TN) No.248 遺跡では、全国的にも珍しい、大規模な縄文時代の粘土採掘場が見つっています。粘土層をねらって数十 cm から3 m以上も垂直に掘られた深い穴が、広大な斜面一帯に隙間なく掘られており、膨大な量の粘土が1,000年以上にわたり採掘されたと思われています。それでは、その粘土はどこへ運ばれていたのでしょうか。その行き先のひとつと推定されるのが、この遺跡のすぐ近くにある TN No.245 遺跡です。

TN No.245 遺跡では粘土採掘場と同じ頃に営まれたムラが見つっています。そしてある住居の床からは、焼く前の土器と土器の製作台が並んで出土しました。土器は模様付けまでされていましたが、なんらかの事情で完成を見なかったようです。しかしそのおかげで、このムラで土器が作られていたことが明らかになりました。

また、この2つの遺跡を結ぶ遺物もあります。そ

の1つが土を掘る道具と考えられている打製石斧で、2つに割れた石斧の一方が TN No.245 遺跡から、もう一方が TN No.248 遺跡から見つかりました。この2つの場所には行き来があったのです。

その後の時代にも、粘土は需要のある資源でした。特に奈良時代に武蔵国府と国分寺が創建された折には、その豪華な建造物のために瓦が焼かれ、役人たちが使う道具として須恵器の生産も始まります。

国分寺創建期の瓦窯が見つかった、現在の稲城市大丸に所在する TN No.513 遺跡からは、多摩郡の「多」、榛沢郡の「榛」というように、武蔵国の郡名と推定される文字が刻まれた瓦が出土しています。文字を付すのは各郡からの依頼で焼いた瓦を示すためと考えられており、丘陵の粘土と瓦窯が国を挙げた大事業を支えていた様子が窺えます。

このように瓦や須恵器の生産が盛んに行われたのは、良質な粘土に加え、登り窯を造るのに適した斜面や、燃料となる木々といった恵みが豊富にあったことも関係しているのでしょうか。

展示室では、多摩丘陵の3つめの顔である「恵」について、今回紹介した「粘土」の他に、「製鉄」そして「木材」にも注目して紹介しています。人々はこれらの恵みをもとに、どのような生業を営んだのでしょうか。ぜひご来館いただき、ご自分の目で確かめてみてください。(宮本 由子)



縄文時代の粘土採掘場 (TN No.248遺跡)



打製石斧
(上半TN No.248遺跡・
下半TN No.245遺跡)



郡名瓦 (TN No.513遺跡)

※今号の表紙：2000年9月20日に行われた多摩ニュータウンNo.72 遺跡の遺跡見学会で説明をする丹野調査研究員。



たまのよこやま 131

2022年12月23日発行

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 多摩市落合1-14-2

TEL 042-373-5296 <https://www.tef.or.jp/maibun/>

